第34弾

どんな超能力あればいいのかしら？

F「超能力ってどんなのがあるんですっけ？テレパシー、透視、予言…」
M「超能力と言えば、スプーン曲げよっ。あれは、一体、何なのかしら？私が、教育実習に行ったときに、給食のスプーンを曲げるのを見せてくる子がいたんだけど結局、だまされているのか何かわからなかったのよねぇ」
F「力をかけるポイントがあってそこに力を加えて曲げてるって聞きましたよ」
M「でも、この間、テレビでスプーン曲げができる人が出てきて、番組スタッフにスプーンを持たせて、遠隔でスプーンを曲げさせていたわよ」
S「ネットの動画で見たユリ・ゲラーはスプーンの柄をなでてるだけでした」
M「スプーン曲げを習得することが、私たちの年末の課題ね」
F「最近のラノベは夢で死ぬ人がわかるといった予知をする的なものが多いですね。『誰も死なないミステリーを君に』とか」
S「そういえば、昔、ノストラダムスの大予言ってありましたよね。1999年から2000年にかけて、めっちゃ、びびってました」
M「あたしは、そのとき、ある方のコンサートに東京へ行っていて、って、それはSさん、メモらなくていいわよ。（注：対談の記事を書くために当月の記事担当者がメモを取る。）ところでノストラダムスって、実在の人物なの？？」
F「実在してるみたいですよ。お医者さんで、占星術師だそうです」
M「あなたたちは、どんな超能力が欲しいの？」
S「不老不死の能力ですかねえ」
M「それは、超能力なの？でも、若くして、長生きをするのがいいわよね。リボンとかついた服がだんだん着られなくなってくるのよ」
F「若い子へのアドバイスはお気に入りの服は箪笥にしまっておかず、すぐに着なさいってことですね。ヤングたちだったら、暗記能力が欲しいのでしょうね」
S「ドラ〇もんの、あ〇きパンですね」
M「図書館スタッフとしては、超能力で本を棚にパンって、配架できればいいのにね」
F「そっちの、パンですか」
S「お後がよろしいようで」

ブログやってるよ！http://sanda-city-lib-ya.sblo.jp/→

YA通信

ホンダラケ

2020.12.1

年末年始　スプーンを曲げろ！

今回のテーマは**超能力**です。
超能力じゃなくても、すごい能力が身についたら、いいのになあ。
あなたも、新しい年に何かを始めてみてはいかがでしょうか？

『私は存在が空気』

中田 永一:著 祥伝社 2015年刊　Fナカ

表題作の存在を空気のように消せる女子高生、瞬間移動をする能力をつけた男子高生、発火能力を持つ少女など、超能力者が登場する短編恋愛小説。
収録されている「恋する交差点」は、スクランブル交差点でお互いの鞄の取っ手が鎖のように絡まってしまった男女の話。それは、一体どんな超能力？ショートショートですが、CMや映画の予告編のような映像が浮かんでくる素敵なお話です。

ホンダラケとは

本誌は、読者の身も心も「本だらけ」にしてやろうという心意気から生まれた中高生向け小冊子です。本誌に登場する本は全て三田市立図書館本館のＹＡ（ヤングアダルト）コーナーでご覧いただけます。
２か月に１度、年６回発行予定です。
ホンダラケは皆様の投稿をお待ちしております。ＹＡコーナーに用紙・ポストがございますので、おすすめ本や本誌の感想・要望などお寄せ下さい。

青春読書記

～三田学園図書委員会より愛をこめて～

テーマは「有川浩」。小説家単独一本勝負ですってよ。

ご紹介いただくのは、あの!ラブ度全開女子の妄想の詰まった恋愛小説♡

イヤン(≧▽≦)

『植物図鑑』

「お嬢さん、よかったら俺を拾ってくれませんか。咬みません。躾のできたよい子です。」さやかが仕事から帰ると、玄関の前に男の人がお腹をすかせて倒れていた。次の日の朝、さやかが美味しそうな味噌汁の匂いで目を覚ますと、「あ、おはよう。起きた？」キッチンから見覚えのある男の人が顔を出した。その日から二人の同居生活が始まったのであった。

P.N.　キダ（高校１年生）

有川　浩：著
F/アリ
幻冬舎文庫　2013 年

新着図書 Pick Up

『こころと身体の心理学』 山口真美:著 2020 年刊 岩波書店

最近は、ＶＲ技術の発展が目覚ましく、その場にいなくてもいるかのような感覚を味わえるのだとか。このまま進むと、身体って何ぞや……とちょっぴり不安に。この本は、そんな身体感覚の不思議について、科学的な視点を交えて説明したものです。実験（昔のは結構えげつない）をもとに具体的に書かれていて、無意識のうちに身体はこんな反応しているのか！と好奇心を痛いくらいに刺激されます。心だけでも、身体だけでも、ない。どちらもひっくるめて、あなたは形作られているのです。

141.2/20

「こんな本、棚から見つけました」のコーナー

このコーナーでは、スタッフが棚を見て“再発見”をした本を紹介します

『ラノベ古事記　日本の神様とはじまりの物語』

小野寺 優:[訳]著　2017 年刊 KADOKAWA

『天の岩戸』『因幡の白兎』『ヤマタノオロチ退治』･･･エピソードだけなら知ってる話もありますよね？これらは全部日本最古の歴史書と言われる「古事記」に入っているお話。そのまま読むのは難しいなーというあなたのために、超読みやすくラノベ風に書いてあるのが本書。ラノベ風になれば神様だってなんだかチャラいキャラなんですけど、いいのかしら？ちなみに「ラノベ日本書紀」は芸術新潮 2020 年 2 月号に掲載されています。

913.2/オノ

ＹＡ世代のために血を吐く思いで名作を紹介するコーナー

『伊豆の踊子』より「抒情歌」

川端康成:著　2003 年刊　新潮社

死人にものいいかけるとは、なんという悲しい人間の習わしでありましょう。

ある女の人が、亡くなった恋しい人を紅梅に見て思い出を語りかけるという短編です。
初めは、美しい情景を呼び起こす文章で、浮かび上がる映像を味わう物語なのかしら、と思いました。けれど、最後まで読み進めて心に残ったのは、心象風景だけではなかったのです。
主人公の女の人は、ものを見通す力を持っていました。
その力で離れていた母親の死を知れたのです。それなのに、好きな人の死を感じ取れなかった……取り乱したところのない静かな語り口から彼女の叫びが聞こえてきます。

F/カワ